

取組の背景

過疎山村の介護問題が深刻化するなか、地域医療センターで医師、福祉関係者、住民、学生など20名程度の各種の人々が集まり、交流事業「山の勉強会」を2年間実施し、山村介護のあり方について議論を重ねた。

その「山の勉強会」が発端となり、岐阜県のふるさと福祉村構想の話が生まれたのを機に、安心して暮らせる地域づくりに向けて、ふるさと福祉村研究会が発足した。

当時はプロジェクトチーム体制であったが、継続して取り組めるよう組織化を図り、平成15年にふるさと福祉村・西濃として正式に設立された。NPO法人「校舎のない学校」は、ふるさと福祉村・西濃の教育機能を担う位置づけを図って実践を継続し、社会に役立てるようにと、同年併せて設立された。

取組の概要

「校舎のない学校」は、豊かに生まれ、生活し老いてゆける地域づくりの教育機能を担っており、『地域にある力が学びの場である。地域にある豊かさの質、そこから人が安心して豊かに暮らすために何が必要かを学び合う。そして、自分の人生を自分で選択し、豊かに暮らす力を育てる』ことを目的としている。

- ・団体設立時期：2003年
- ・特活認証日：2003年3月27日
- ・事務局の体制：非専従1.5人
- ・入会金：正会員1,000円 支援会員なし
利用会員1,000円
- ・会費（年額）：正会員2,000円、支援会員2,000円／口、学生会員1,000円／口、利用会員なし

取組の内容

勉強会、研究会を通じて知った山村部は、一見生活基盤が弱いというイメージがあるが、生活の質や人間性は都会に比べて豊かで強い。その強さの源となる『自然を利用した暮らしの知恵』、『文化の伝承』、『地域の助け合い』が今後も循環していくよう維持していく必要がある。

山村の高齢者は自分の力で野菜を育て、生き

る知恵や力をたくさんもっている。一人で生活し続けることをサポートし、もっている力を発揮して、町の若者に生きる力を教える「先生」となってもらおう。

このように、地域での活動、実践、交流などのなかからひきだされる教育機能を活かすことで、誰もが安心して暮らし続けられる地域社会づくりに寄与できる研修を実施している。

【研修コース】

- ・人と環境にやさしい建築コース
- ・山村と町の交流コース
- ・地域医療コース
- ・地域福祉コース
- ・子育てコース
- ・私の人生設計コース
- ・ワークショップ

【その他事業】

- ・人生を選択する力を育てる教材づくり
(人生すごろく…商標登録準備中)
- ・H16調査「在宅介護サービスの現状について」
(福祉村活性化事業利用 ケアマネージャーに配布)
- ・絵本「ユタカノキ」の制作 1～3 (福祉村活性化事業利用。福祉を題材、現在4冊目を発行予定)
- ・「安全安心動態情報調査」(岐阜県委託事業)
- ・記録映像の作成 (公益信託ぎふNPOはつらつファンド)
- ・認知症ケアセミナーの開催 (ふるさと福祉村活性化事業)
- ・かやぶき民家「竹姿庵」の再生 (県、村との街かどふれあいプラザ事業 だれも住んでいないかやぶき民家を再生。毎年、屋根の葺き替えを参加者を募って開催。地元高齢者のふれあい拠点であり、ワークショップの研修施設としても活用)
- ・親子の交流事業 (大根の種まき、収穫など)
- ・馬頭琴のコンサート (かやぶきの家でモンゴルの第一人者を呼び、コンサート開催。H19.5.19には読み聞かせの絵本コンサートと共同でサラマンカホールでのコンサート開催予定) 等々

成果

【ワークショップ】

2泊3日で一般の農村民家にステイ。畑仕事を手

伝いながら全て自分のことは自分で言い、体験をおして地域の知恵を学ぶ。

H18年度13回開催予定、参加者150名以上。H18は大学から85人の申し込みがあった。

韓国やアメリカからも体験研修生として参加。

ある学生は、授業もまともに聞かないような生徒だったが、ワークショップに参加し、ガラス細工で繊細な細工を作成し、周りから評価されたところ、それを契機に勉強に取り組むようになり、学年でトップの成績をとって福祉系の大学に合格した。

【親子の交流事業】

坂内の大根農家が納品先の工場の都合により出荷できなくなった時があり、大垣の「NPO法人 大垣おやこ劇場」と協力して、子どもたちによる体験大根引きを企画したところ、かなり好評だったため、以降5年間、種まきやそり遊びも交えて毎年開催することになった。

【その他】

引きこもりの人と認知症の人を引き合わせたところ、認知症の人は先入観が無いせいか、引きこもりの人を親しく受け入れ、引きこもりの人はその広い包容力を受け入れられ、構える暇が無く、両者ともに良い影響を与えた。

成果の要因

昨年立ち上がった『いびNPO法人連絡協議会』などによるNPO法人同士の横のネットワークが、ワークショップの受け入れ先や参加者募集の助力となった。

総合ケアセンターサンビレッジと在宅介護事業所 新生メディカルの社会貢献により事務局が確立しているため、しっかりした運営体制を維持することができた。

医療、介護、IT、建築、福祉、教育、行政など多方面の専門家がメンバーであるため、様々な企画、検証が行われた。

今後の課題

ケアマネージャーやヘルパーなどの自立支援の業務を行う人たちが、実際に自立をした高齢者を知らないケースが多いので、このような専門家に対する研修を行いたい。

NPO法人は財政面で苦しんでいるところが多く、事務所の維持が難しい。事務局1人分の人件費は確保したいが、多くの割合をボランティアで行うしかないのが実情である。

ホームステイのエリアを拡大していく必要があるものの、西濃全域が対象範囲なのでかなり広域であり、思うようには手が回らない。

ワークショップは、単独で自立化する道を探っていきたい。そのためには社会人の参加者を増やしていく必要がある。教員、公務員などがワークショップに参加すれば、山村地域が大きい岐阜県の本来の姿や教育のあり方が分かるのではないかと。

取組が地域に根ざしていくためには経済を伴わないと継続していかない。善意だけでは廃れてしまうので、お話していただく地域の人たちにもきちんと謝礼を払っているが、対面に見合うものにしたい。

行政への期待

- ・岐阜県のNPO法人は他県と比較しても恵まれていると思う。特に、はつらつファンドは使いやすい。今後は助成の評価システムをしっかりと確立して、県民に認知されるファンド拡大を図って欲しい。
- ・県の担当の方には、できれば参加していただいた方が良いが、せめて実際の活動を自分の目で見る機会を作って欲しい。
- ・ぎふポータルを通じて、今後も各種情報を提供して欲しい。例えば、障害者施設の評価や地域生活に関することなどは、自分たちの業務にかなり参考になる。
- ・現在の環境を維持していくことに対しても評価されるシステムを希望したい。山村部に住んでいるだけでも、例えば、田で稲作をすれば保水、木の手入れをしていけばCO2の抑制など、都会の人が暮らすよりもかなり有益な効果が生み出されている。そういった人たちに対しても助成が必要なのではないか。
- ・池田町と「死ぬまで現役～自分のために、みんなのために～」の事業を計画しており、地元での活動も展開していく予定である。

この人にお話をうかがいました！

NPO法人 校舎のない学校
事務局長 神原 三保子さん

調査日：平成18年10月24日（火）

調査者：西濃振興局揖斐事務所 木村